書評

藤縄謙三著 ギリシア神話の世界観

永井康視

本書は、著者の「ホメロスとミュケナイ時代」(『西洋史学』54)、「ギリシアの英雄叙事詩の社会的基盤」(『史学雑誌』73編8—9号)、「母権的宗教と父権的体制——ギリシア文化の基礎的構造——」(『西洋古典学研究』17)などの一連の研究を背景にして、さきに著者が『ホメロスの世界』(至誠堂)でホメロス叙事詩が生み出された社会的背景、精神的風土などを考察しながら、専門外の人たちの手引きにもなるホメロス世界の究明に成功を収めたように、本書も、ギリシア神話の形成過程、その社会的背景などを考察しながら、専門外の人たちのギリシア神話入門の手引きにもなるよう、複雑多岐にわたるギリシア神話を、実にみごとに整理し、紹介し、とりわけ神話を通じてギリシア人の精神的風土を究明しようとしたものである。そのための原典からの必要な個所の著者自らの訳出は、読者にギリシア人の精神的風土をじかに触れさせるに効果を発揮したとともに、ギリシア古典への親しみを呼び起こすものに役立っている。本書は、著者自らが表紙において明記しているように、いわゆる神話学ではなく、古典学さらには人間学といった立場からの記述で、とりわけ歴史研究者が神話を通じてギリシア人の宇宙観、世界観あるいは人生観を究明しようとしたものと言うことができよう。

本書は九章に分かたれている。第1章「神々の顕現」、第2章「宇宙および神々の誕生」、第3章「神々と風土」、第4章「人類文明の神話」、第5章「民族形成の伝説」、第6章「豊饒と純潔」、第7章「神助と神罰」、第8章「英雄の再生」、第9章「英雄的世界から牧歌的世界へ」である。

本書は、さきに言及したように、専門外の人たちのためにもギリシア神話への案内書となることを意図したものであるから、著者は、著名な神話をできるだけ網羅しようと配慮したに違いない。しかも同時に、神話の形成やその歴史的発展を通じてギリシア人の世界観を究明しようとしたものであるから、いわば神話の世界にどのように歴史をはめ込むか、そして、複雑多岐にわたる神話をどのように時代的に整理するか、これらが著者にとっての最も労多き仕事であったろうと推測し得る。本書ではそれがみごとに果されている。そしてその成功が、本書をギリシア神話世界への入門書としてすぐれた良書としている。

今日までの一般のギリシア神話入門書では、本書において扱われている第2章(ヘシオドス『神統記』を中心とする宇宙および神々誕生の神話)、第4章(五時代の神話、プロメテウス神話、パンドラの瓶)、第5章(アイオロスの子孫、アテナイの王家、ペルセウス王家、ペロプス王家、テーバイ王家、ミノス王家をめぐる神話)の内容が主として解説風に取り扱われ、それもややも

すれば羅列的になるという傾向あるいは運命を持っていたといえる。本書はさらに第6章、第7章（ポセイドン、アルテミス、ヘラクレス、シシュフォス家系などをめぐる神話、トロイア戦争、オデュッセウスの冒険）を加え、先の三章において扱い得なかったその他の著名な諸神話を補うと共に、一般には悲劇作品の課題として扱われる諸神話をも第8章、第9章（アトレウス家の物語、オイディプス伝説、『アンティゴネ』、『アルケスティス』、『イオン』、『バッカイ』など）において加え補っている。いわば著名なほとんどすべての諸神話が本書の中に網羅されていると言っていい。しかもそれらが、宇宙および神々の誕生、人類文明の神話、民族形成の伝説といった従来からの分類の仕方のほかに、これらの分類には当てはまらない神々をも含めて、著者独自の分類としての、豊饒の女神崇拝に連なる先住民の宗教に関係の深い神々、他方、家父長的性格を持つゼウス神崇拝に連なる侵入民の宗教に関係の深い神々という形で、神話の形成や発展の過程の中に巧みにこれらを位置づけるとともに、またその間に、人間と自然、人間と神々との関係を考察しながら、当時の人たちの神々に対する感情をも究明しようとしている。こうして複雑多岐にわたる神話に脈絡と生命を与え、ギリシア神話を容易に読者に概観させるとともに、ギリシアの神々に対しての親近感を読者に持たせることに成功している。このような意味において本書はすぐれたギリシア神話入門書ということができよう。

以上見てきたところは、本書のギリシア神話入門書としての特徴であるが、本書の主題はそのことにあわせてギリシア神話を通じてのギリシア人の世界観を究明するということにある。つまり、ギリシア人はどのような民族か、彼らはどのような神々を信じ、その神々と人間との関係はどのようなものであろうか、彼らはそこで何を考え、どのように生きていたのだろうか、他民族との間にはどのような違いがあるだろうか、他民族とは違った彼らの特質はどのようなもので、時代の変遷とともにそれはどのように移り変わるのだろうか。こういった問いが本書の背後に感じられる。著者はこのようなことを常に自らに問いただしながら、神話を通じてのギリシア人の世界観を究明しようとしたものに違いない。これが著者自らの言う、いわゆる神話学ではなく、古典学さらには人間学のような立場からの考察ということになるのであろう。

さて、そのような点からの本書の梗概を簡単に跡づけてみたい。まず（第1章　神々の顕現）、何を拠所にすることによってわれわれはギリシア人の神々に近づくことができるだろうかと著者は問う。ギリシア人は神像を作り、壺絵や詩や散文に神々を画いたが、その何れによって彼らの神々に近づくことができるのだろうか。著者はその立場を明らかにする。つまり、最古の文献ホメロスやヘシオドスからエウリピデスまでの原典を主とし、そこに見出し得ない場合にはアポロドロスやパウサニアスのようなローマ時代の著作によって補うと。それらによってギリシアの神々の重要な部分は凡そ理解することができるからだと。というのは、ギリシアに多くの神像のあるうちでフェイディアス作のオリュムピアのゼウス神像は当時に絶大な賞讃を受けていた。その神像を作る際にフェイディアスは何をモデルにしたかと尋ねられて、『イリアス』の詩句を挙げたと言われる。つまり当時にあって彫刻家たちが神々の姿を心に画くとき、そのモデルをホメロスなどの詩人の詩

句によったのであるから、われわれも古典作品を通じてある程度ギリシアの神々に近づくことが出来るであろうと考え得る。しかもそのうえに、ギリシアの神々は、実は、その詩人たちによって構想され整理されたものであれば、なおさらのことだと。そうであれば、われわれは詩人たちの手になる作品を通じて一層ギリシアの神々に近づくことができるということになろう。

そのようなギリシア神話は他民族の神話とは大いに違っている。『旧約聖書』は祭司たちの手で整理され固定化され、『古事記』は文官的立場の人が王朝的・国家的観点から述作し、といった風に、他民族の神話は一般に教団的・国家的立場から整理され、経典として固定されてしまうが、ギリシアの神話は「牧歌的な条件の中で詩人によって構想され整理されたもので」、いわば物語の専門家が自由に構想し形成したものであるから洗練されているし、また神話そのものの発展が教団的・国家的立場などから阻止されることなく、叙事詩人、抒情詩人、劇作家へと千二百年余りにもわたって継承されていったので、異常なほどに豊かで多彩になっている。このギリシア神話の豊富さと多彩さについて、それを生み出したその他の諸原因、豊富・多彩性の性質と内容、それがなぜ長い期間にわたって持続し発展し得たかを、本書は種々の側面から考察する。そしてそれが本書の梗概だと言ってもいい。

ここで「牧歌的な条件」というのは、詩人が神話を構想するとき、農民詩人ヘシオドスでさえも、「聖山ヘリコンの麓にて、羊を飼っていたとき、ムーサイは麗しき歌を教え給うた」(『神統記』22ff.)と歌っているように、山あり泉あり岩あり牧草ありと言った牧地、そこでの生活こそが、神話を構想するに最適の地であった、少なくともそのような牧地がなければギリシア神話は別個の性質のものになっていたであろうという意味で言っていると思われる。いわゆる「牧人、農夫の生活を主題とした素朴でのどかな詩歌」という「牧歌」の持つ意味よりも、もっと素朴な形で自然に密着した、牧畜生活に結びついた神話という意味を持っている。ローマ時代に入ってのオウィディウスに見られるようなものこそ一般に牧歌的という言葉に伴う印象をさそうのであろうが、著者はそれらを「極度に牧歌的な」とか「柔弱な牧歌趣味」と呼んでいる。

さて、詩人たちが神話の構想を生み出した自然に接するとき、彼らはそこに何を感じ、どのようなものとして自然界の事物を見たか。著者は考える。ホメロス、ヘシオドスの時代においてすでに、ギリシア語自体に文法上の性別による(川は男性、泉は女性と)男女の別があり、詩人たちはその性別に応じてそれらが互いに恋愛し結婚するとみて、万物の生成・誕生を構想した。詩人たちが構想する神話の世界はいわば生物学的な世界だと言える。その実例をヘシオドスの『神統記』の説明によって詳しく展開する(第2章)。

この男女の別よりなる生物学的な世界に対して、文法上の中性名詞からなる別個の世界がギリシア人にはあった。彼らは中性名詞(水、火、光など)には一般的なもの、エレメント的なものを感じ、これらは神話的世界には登場せず、別個の思惟の世界、いわば哲学的な思惟の世界を構成していた。つまり、ギリシア人の思惟形態の中には、文法上の性別による二つの別個の世界が本性的にあったという注目すべき指摘を、著者はしている。

ヘシオドスの『神統記』は、神話的世界（生物学的世界）における宇宙や神々の生成・誕生を歌ったものであったが、その世界像には、自然界に対する、さらには人生や社会に対するヘシオドスの鋭敏で総括的な観察や経験が横たわっていること、ひいては人間の立場に立っての構想が見られること、また、ギリシアの神々は自然そのものの諸部分が神格化されたもの、少なくとも自然界、いわゆる客観的な自然像としてのではなく生活に密接した自然（風土）から生み出されたものであることなどを指摘する。そして、次に神々と風土（第3章）、人間の立場に立っての神話の形成（第4章　人類文明の神話）を取り上げている。

ギリシアの地形は、平地、山脈、海がいりまじって横たわり、「どこにおいても海に近く、山々に囲まれ、牧地や農地があり、農業、牧畜、狩猟、漁業という基本的生業が、各地域内に並存し交錯して行われていた。したがって、一人で二、三の生業を兼業したり、あるいは少なくとも自分の眼で他の生業を親しく見ることができた。そのためギリシア人の能力が多面的に育成されたわけであり、ギリシア文化の全人的性格も、これと関係があるであろう」として、このギリシアの複雑多彩な風土的特徴がギリシアの神話の複雑多彩性に関連があるとともに、またそれがギリシア神話の複雑多彩性を維持し得る条件となっていたと著者は指摘する。つまり、ギリシア神話を生み出す「牧歌的な条件」がこのような多彩な風土があればこそ維持し得たと考えるからであろう。

ギリシア神話の複雑多彩性は、複雑多彩な風土、詩人による人間の立場に立っての自然界、人生、社会に対する観察、経験が織りなすところに生み出されるが、さらにギリシア神話の形成の過程における先住民の母権制的な宗教と侵入民の遊牧民族にみられる父権制的な宗教との混合、融和、さらに民族形成期において各地域毎に形成された神話が融合、整理されてゆくことが、また主要な要素ともなっていることを指摘し、例証する（第5章　民俗形成の伝説）。

次に、先住民の宗教と侵入民の宗教がなぜこのようにまでも円滑に融和し得たかを考察する。それは、先住民の持っていた聖婚（hieros gamos）という一種の呪術的な宗教儀式が仲立ちを果したからであろうとのすぐれた見解を展開する（第6章　豊饒と純潔）。ミノア文明以前の新石器時代からエーゲ海地域では一般に豊饒の女神像が造られ、女神が優位を占める母権制的な宗教があった。そこへ侵入してきたギリシア人は印欧語族に共通の天の神（ゼウス）を主神と仰ぐ男性的な、明らかに父権制的な社会を構成していた民族で、遊牧民一般に見られる偶像崇拝とは反対の傾向を持つ民族であったろう。この対照的な両民族の宗教がどのようにして融和し得たか。先住民族の間には冬の終りや初春に農業や牧畜の豊饒を得ようとする象徴的な性的結合をする聖婚の儀というものがあり、あの豊饒の女神たちはあちこちでこの聖婚の儀をあげていた。そこへ新来のゼウス大神などが踏み込んで、これまでの矮小な男神を追い出して、その代りを勤めるようになったからであろうと、ミノスの王妃パシファエのゼウスの化身ともいわれる牡牛との交わり、ポセイドン（大地の夫）などの例をあげて説明する。また、これに関連してトロイア戦争の原因を、純潔の原理（父権制的社会――正規の結婚、一夫一妻の守護神ヘラ、処女神アテナ）と豊饒の原理（母権制的宗教――愛欲の女神アフロディ

テ）との対立、社会の体制的な相違の反映として解釈を試みるのも興味深い。

次にギリシアの神々と人間生活の実際との関連に若干眼を向け（第7章　神助と神罰）、最後に、このような複雑多彩な神話がどのように悲劇作品にまで継承されたかを考察する。

ホメロスからヘシオドスへ、さらに前七世紀の抒情詩人たちへと時代が進展すると、個人の自我が確立し、人々は神々や英雄の世界よりもむしろ自分の周囲の現実の世界に注目し、神話批判や神話無視の風潮が生まれるが、前六世紀後半になってアテナイでは再び悲劇の中に神話が復活する。それはなぜか。神話は本来個人ではなく村落、国家、民族という集団の思惟をよりどころとするものであるから、個人の自己意識の強い抒情詩の時代には神話は無視され、アテナイ国家の公式祭典としての悲劇の中に共同体的担い手を見出したのだ。その悲劇が国家の祭典と結びつくのは、前六世紀におけるポリスの成立、それに関連しての英霊崇拝に関係があり、英霊は地下に眠るから地母神崇拝とも密接に連なり、悲劇はいわば地母神崇拝と死者崇拝の土壌の上にホメロス的な神話伝説を受容することによって成立したのだと論を進めている。そして悲劇に登場する英雄時代の王たちが民主社会の舞台の上で妨げられることなくなぜ行動し得たか。それはコロスの働きによるとする。コロスの構成がポリスを直接にになう男盛りの連中でなく女性や老人であったから、あるいは激情的に歌い、あるいは冷静に語り、永遠の真理や常識を説くことができ、非現実的な物語をも非現実的には見せなかったからだと（第8章　英雄の再生）。

こうしてアイスキュロスやソフォクレスの悲劇において英雄的雰囲気が蘇り、国家意識や合理主義がそこに認められるが、エウリピデスに至ると、人間的な神々の姿は薄れて、英雄たちの力も弱まり、国家意識や合理主義に対して人間・自然の本来の生命力が強く前面に出てくる。彼の作品には明るい牧場、草や木の茂った土地、谷間、山の茂みなどへの言及も頻繁に見える。つまりエウリピデスにおいて牧歌的な色彩が強くなるという（第9章　英雄的世界から牧歌的世界へ）。

以上簡単に論述のあら筋を追ってみたが、本書における多方面からの豊かな考察をすべて一つ一つ紹介することは、おそらく不可能であろう。しかし全体として言えば、初めに第一の特徴としてあげたが、複雑多岐にわたる神話を、どのように歴史の中に整理し、紹介するかが本書の主題であったと言ってもいいだろう。最後には悲劇作品に現われる神話を紹介するが、それも、その紹介こそが主題なのであって、悲劇世界そのものを究明しようとしたものではなかろう。だから、簡単に抒情詩の時代には神話無視の風潮が神々との関係を疎遠にしたかのように扱っているが、それでは、なぜ壺絵においては連綿と神話世界が画かれ続けられるのだろうか。文献だけによれば確かにここには何らかの断続が認められよう。しかしギリシア人の心にも果してそのような断続があったのだろうか。神話は詩人たちによって創られるとする著者の立場からすれば、一応それも筋道の通ったものではあろうが、ギリシア人の心情に立ち入って問いただしてみるとき、なおそこには違った側面もあるだろう。また、複雑多彩なギリシア神話はその複雑多彩なギリシアの風土によって維持し得たと見ていたのであったが、それではなぜ抒情詩の時代に神話無視的な風潮が起

こるのであろうか。無論、風土だけが神話維持の条件ではないが、それはとにかく、何が一体ギリシア人を神話と結びつけていたのであろうか。そもそも神話の世界とはどのようなものなのであろうか。ギリシア人に対して神話はどのような作用を及ぼしていたのであろうか。こういったことを、第九章の終りにでも言及していて欲しかった。といっても、それは余りにも多望な願いだと言っていいだろう。しかし、そういうことをも願いたいほどに、本書はユニークな記述だと言うことができよう。

（A5判二八七頁　昭和四六年五月　新潮社刊　定価五二〇円）

（京都女子大学助教授・　　）